

現場に居合わせた“あなた”の手当てが重要です！

9月9日は「救急の日」

救命には、最初の数分間の処置が重要です。現場に居合わせた皆さんの心肺蘇生とAED(自動体外式除細動器)の使用により、救える命があります。勇気を持って行動に移し、救命の第一走者として“救命リレー”のスタートを切ってください。

ひたちなか・東海広域事務組合消防本部警防課では、心肺蘇生やAED、異物除去、止血法などを学ぶ「普通救命講習会」を実施しています。「救急の日」をきっかけに、正しい救命方法を学んでみませんか。

申し込み・問い合わせ▼ひたちなか・東海広域事務組合消防本部警防課(☎282-2153)

救命処置の際は、感染症の予防を心掛けましょう

①119番通報とAED要請…突然人が倒れたら、心停止を疑い、119番通報とAEDの手配をする。

②感染予防…口や鼻をマスクやハンカチ等で覆う。

③胸骨圧迫…ハンズオンリーCPR(人工呼吸はせず胸骨圧迫のみの蘇生法)を行う。

④AEDの使用…周囲の状況を確認し、安全に電気ショックを与える。

⑤洗浄・消毒…終了後は入念に手洗い等をする。



【東海十二景 真崎浦夕照】

真崎浦は、実りの季節になると一面黄金の稲穂に彩られ、また夕焼けに染まった空の色の美しいことから、「真崎浦夕照」と名付けられ、「東海十二景」の一つに選ばれています。鎌倉時代まで真崎浦は村松海岸の入江でした。かつての様子を、応仁2(1468)年に連歌師の宗祇が詠んでいます(東海村史通史編「227〜230頁」が、この頃から風光明媚で有名だったようです。その後、海流や風によって運ばれた砂が堆積し、湖となりました。水戸藩の二代藩主だった徳川光圀が、常陸太田の西山御殿(西山荘)に移り住んだ後に真崎浦を訪れ、その風景を漢詩に詠んでいます。光圀は水戸藩領内の各地を巡り歩いて、領内の民衆の生活や地域の伝承などについて

ふるさと歴訪
〜歴史を再発見〜

前東海村教育委員

西野 晉哉

聞き取っています。その際、主だった人物の屋敷内に宿泊所(「御殿」と呼ぶ)を設け、親しく懇談をしています。また、通商の要所である湊村(那珂湊)に「寅寅閣」という御殿を建て、錨を下ろした商船の船頭たちを呼び寄せ、各地の情報を得ていました。この時、湊村への行き帰りに立ち寄るため、村松山虚空蔵堂の龍蔵院(野上家)別当の屋敷内に御殿を建て、何度も宿泊しています。その折に真崎浦に舟を出し、しばしの寛ぎを楽しむこともあったようです。左記は、その際に詠まれた漢詩の一つ「正木湖即景」です。

正木湖邊夕暉に棹さす

水煙風緩み晚涼微かなり

暫時柁に倚りて望眼を放てば

青松を點破して白鷺飛ぶ

「夏の夕涼みに舟を出し眺めていると、松林を背景に白鷺が飛んでいるのが見える」という、のどかな情景を詠っています。

江戸時代の真崎浦は松林で囲まれていたようです。田に水を張った季節に畦道にたたずむと、当時と同様に、真崎浦の美しさと風の爽やかさが感じられることでしょう。

※大漢和辞典に「寅は寅に同じ、寅寅(書経堯典)」とある。